

第 1 1 回世界選手権大会報告書

目次

御挨拶

選手・役員報告

村越 真：世界選手権85概観

山岸 倫也：チームリーダーとして

西田 伸一：日本のオリエンテーリングのレベルと
世界選手権への参加の意義について

福島 弘幸：リレーの傍観者的立場から見て

鶴岡 千津子：

多田 正純：個人レースの傍観者的視点

長田 由紀：

新沢 祐子：短期の遠征をして

本植 早生：

愛場 庸雅：チームドクターとして

今回の遠征メンバー

成績表

会計報告

御挨拶

このたびは第11回世界選手権大会遠征に御援助頂きありがとうございました。132名(クラブを含む)もの方々から総額53万6千円と50US\$という多額の援助を頂き選手役員一同、心からお礼申し上げます。御援助いただいた浄財は世界選手権大会に先立ち、8月23日から9月1日まで行われたトレーニングキャンプの選手9名の参加費として使わせていただきました。

今回の世界選手権はヨーロッパ以外で開催される初めての大会のため、世界のオリエンティアから注目されていました。また、日本にとっては、男子団体では5回目の参加になり、1つの区切りの大会でもありました。

今後1987年フランス、1989年スウェーデン、1991年アメリカ(予想)と世界選手権大会は開催されてゆきます。WOC SQUADは、このまま現在のような私的団体であるのか、あるいは、日本オリエンテーリング連盟設立時にはNational squadとして公的な存在になるのか、現時点では全く不明です。しかし、いずれの形態になるにせよ、我々SQUADのメンバー一同は今後も様々な方策で日本のオリエンテーリングのレベルアップに全力をつくしていく所存です。

オリエンティアの皆様のさらなる御支援をよろしくお願い申し上げます。

1985年11月3日

WOC SQUAD メンバー一同

今回の世界選手権は、11回の歴史のなかで初めてヨーロッパ外のオーストラリアでおこなわれた。そして、開催国の問題にとどまらず全ての面で新たなエポックの契機となる大会であった。日本チームに関する詳細な報告は各選手の報告に十分見られるので、ここでは、今回の世界選手権の特色について概観することにする。

(1) AOF (オーストラリア・オリエンテーリング連盟) のような若い連盟が世界選手権を開催しえたこと。AOFの歴史は僅か14年であり、8年前に既に世界選手権の具体的な準備がゆっくりながらすすんでいた。

(2) WOCARNについて。

世界選手権およびトレキャンパと並行して、一般の競技者のためのワールドオリエンテーリングカーニバルが開催されていた。これはオリエンテーリング人口の少ないオーストラリアにあっては、ある意味で、人集めのための窮余の策であったが、実際にはそれ以上の効果をあげた。多くの人々が世界選手権をより身近なものに感じ、また選手の動機づけも高まったであろう。

(3) テラインの特殊性。

テラインは個人用にはグラナイト、リレー用にはゴールドマイニングトガリ・スパーが用意された。前者はその名のとおり花こう岩質の岩と岩盤(地図上の灰色の記号)の多いテラインで、非常に高度の技術を要求するテラインである。後者もやはりその名のとおり緩やかな尾根、沢からなるテラインの沢の部分がかっての金鉱採掘によって人工的な小特徴物の多い地形となっている。個人のレースが一見意外な結果となったのも、グラナイトのテラインの特異性と無関係ではない。

(4) 中堅国の躍進

北欧勢の圧倒的な優位は崩れていないが、中堅国の躍進には目を見張るもの

がある。特に個人で、男子のカナダのテッドが10位！に、オーストリアのローランドが13位に、女子では西ドイツのフィンケが9位にはいったことは注目に値し、81年のオーストラリアが男女ともリレーで6位！に入ったこと同様に我々にとっては希望を抱かせる成績である。また30位や40位のタイムのトップのタイムに対する割合は、81年以来漸減しており全体としてのレベルの向上がうかがえる。このような傾向の背景として、現在多くの国で、コーチング体制の整備が進んでいることを指摘することができる。これまで「お友達」であったニュージーランドがリレーにおいて、大変良い成績をあげているのもスイスからのコーチの招へいと無関係ではなからう。

またこれは直接世界選手権とは関係ないが、世界選手権後のオリエンテーリングに関するシンポジウムでは、生理学から心理学、あるいはコーチング法に関する幅広い研究が発表された。世界のオリエンテーリング界は確かに動いている。そう実感させる遠征であった。

チームリーダーとして

山岸 倫也

このレポートでは、チームリーダーとして、日本チームの現状と問題点について、簡単に報告したい。まずチームとしての最大の進歩は、役員同行であり、大会中のチームのスケジュールへの注意、競技に関するミーティングへの参加、コンディションの調整と維持、セレクションレースの運営など、チームが世界選手権に参加するのに必要な数多くのことを、こなしてくれた。これらの雑務は、今まで選手が分担しておこなってきたが世界選手権のような大レースでは、生活の全てをレースに集中するために使いたいものなので多いに役立った。役員の方々には感謝したい。

世界選手権は競技会であるから、その成績を評価しなければならないが、今回のチームの成績は決して良いものではない。その原因としては

1) 情報の不足

- 2) チームとしての目標の不明確さ、
- 3) 強力なリーダーの不在があげられる。

情報の不足に関しては、気候だけにしても、寒さと雨は予想以上であり、体調をくずす者が多かったし、個人のテラインである「グラナイト地形」にいたっては、現地で初めて具体化して、技術的対応が不十分のまま、レースに臨まなければならなかった。気候は南半球なのでしかたないにしても、技術的な不安はできるかぎり排除しなければ競技をしにきたのではなくなってしまふ。

2)と3)は相互に関連している。日本のような実力のないチームの場合、世界選手権で評価を得るためには、リレーで上位(といっても10位だが)を目指さなければならない。今回は、予選の無い最後の世界選手権なので、個人レースが目標のようになってしまったが、それにしても、情報不足から、満足なレースができるわけではないので、目標とは、言えるものではない。そして、リレーでの惨敗。今まで幸運に恵まれて、リレーでは失敗せずにすんでいただけだったのである。リレーのレースは技術的には易しいので日本でもそれに対応したトレーニングは十分実行できるし、さらに確実に上位を狙えるようなオーダーを組めば今回も12-13位にはなれたはずである。しかし、そのためには、選手にチームの目標を認識させ、トレーニングメニューを組み、選手起用を決定する強力なリーダーが必要なのである。これは、選手1人や単なる役員のまかなえることではない。

世界選手権において、個人やチームがこの実力を発揮するためには、自己の意思とともに、日本のオリエンティアの代表としてレースをするんだという責任感が大切である。今回の世界選手権遠征にあたっては、前回は上回る援助金を頂いたが、援助してくれた多くの人の意思は、単なる世界選手権の参加の援助だけではなく、世界選手権での経験を還元し、さらに多くの人々にハイレベルのオリエンテーリングを理解してもらうための援助であると考えたい。

すべてのオリエンティアの代表という意識と責任のものに世界選手権に参加

できるように、WOC-SQUADは、活動してゆきたい。

日本のオリエンテーリングのレベルと世界選手権大会への参加の意義について

西田 伸一

毎回言われることですが、今回もまた世界との差を痛感したといわざるを得ません。日本のレベルはランナーの力もマップメイキング等も確実に上がっています。しかし、世界の進歩は日本の進歩より速いスピードで進んでいます。特に中堅国、たとえば西ドイツ、オーストリア、フランス等のレベルアップはめざましく、かつては日本と同じレベルであった国々に差をつけられるようになりました。ましてや、その一段上にランクされるオーストラリア、ブルガリアなどとの差は開く一方です。この原因は日本の地理的及び地形的条件の違いと、選手強化の違いに求められると思います。

まず、第一の地理的条件としては、日本がオリエンテーリングの中心、ヨーロッパから遠く離れた極東に位置していることです。ヨーロッパから離れていて周囲に競い合う国がなく、また、ヨーロッパに遠征するのも多額の費用がかかり、簡単に出来る状況にありません。その点、ヨーロッパにある西ドイツ、フランスなどは恵まれており、イタリア、アイルランドなども今後強くなる可能性があります。また、アメリカ、カナダはヨーロッパに近い東海岸がオリエンテーリングの中心になっています。

第二の地形的条件の違いは、日本の地形では急斜面が多い上に植生が悪く、かつ複雑で細かい地形のところが少ないことがあげられます。そのため、日本ではオリエンテーリングのスピードが上がらず、スピード化する世界のオリエンテーリングに対応できていません。この点、第一の条件では日本と同じである。オーストラリア、ニュージーランドは地形の面ではめげまれており、スピードのあるオリエンテーリング、あるいは複雑な地形の中でののが可能であり、

ヨーロッパに遜色ありません。

第三の選手強化の違いという面が一番大きいと思われます。第一、第二の条件でハンディーがあっても、選手強化がしっかりしていれば、ある程度のハンディーは、はね返すことができます。初心者の段階から速いオリエンテーリングをするための基礎をたたき込み、トップクラスのオリエンティアを集めて National Squad を結成し、専門のコーチ（出来ればヨーロッパの一流の国から招請することが望ましい）の下での系統的なトレーニングを続ける。さらに、年に数週間はヨーロッパでトレーニングを行えば、中堅国にまた追い付くことも可能です。現に、オーストラリア、ニュージーランド、オーストリア等は外部コーチの招請によって選手強化を計っています。

第一、第二の条件の違いは改善しようとしても出来ないものであり、受け入れざるを得ません。しかし、第三の選手強化はやろうと思えば出来ることです。最大のネックは資金でしょうが、これを何とか確保してレベルアップを計っていかなければ日本は世界に取り残され、ひいては日本のオリエンテーリングの衰退にもつながる可能性があります。

一方、世界選手権の参加に関しては、未だ日本のオリエンテーリング界のコンセンサスを得られたとは言いきれません。選手選考の方法が確立されていないこと、世界選手権に対する関心自体が今一步であることなどがその現れです。しかし、最高の地図、最高のテラインで、世界でもっとも速いオリエンチアを決める大会、それが世界選手権大会です。それは、すべての面においてその当時の世界の最先端に行くものです。世界選手権大会に参加することが世界を知ることになるといっても過言ではなく、選手のみならず日本のオリエンテーリング界にとっても意味のあることと確信しています。

リレーを傍観者の立場から見て

福島 弘幸

リレーは個人のレースの2日後の9月6日に行われた。結果については既に

ご存じの通り、男子が16か国中最下位、女子は14か国中12位（但し2チーム失格）というものであった。

テラインは2つの特徴を持った部分の組合わせであり、1つはガリースパーといって尾根と沢が入り組んでいてちょうど日本の埼玉あたりのテラインのコンターの感じで、ここはユーカーリの林で通行可能度は非常によい。もう1つはゴールドマイニングといって金をほった後の沢筋にそって土を削ったりしたために多くのきれつやこぶや穴があり、しかも植生もあまりよくないためかなり神経を使うところである。コースは男子で、11km前後、ガリースパーの部分ではかなりなスピードを要求され、ゴールドマイニングの部分ではスピードをおさえてファインなオリエンテーリングをしなくてはならない。

運営についてコメントすると全体としての印象はまずまずで特に地図は前回までオーストラリアチームの選手であったスチーブ・キーと中心として作ったもので、ヨーロッパの5大国以外でもこれだけの地図が作れるのだなと思わせるぐらいのすばらしいものだった。当日の運営では中間掲示の速報がかなり速かったのと古館伊知郎ばりのゼキョーアナの実況放送が会場に流れ、レースを”見せる”という点ではなかなかもりあがっていたのが目についた。

さて肝心のレースの方だが、女子の方は前日の個人レースの結果などから考えてもまあ順当なところで、むしろ、失格となったアメリカにタイム的にもリードしていたことなどを見ると健闘の部類に入るかもしれない。しかし男子の方は可能性としても、上のニュージーランド、米、伊には勝てたはずで、かなり悔いの残るレースであらう。詳しく見ると1走村越がトップと3分差の62分で走ったのはすばらしかったが、残りの3人については、客観的には75分-80分で走れるはずのところを齋藤87分山岸80分、多田98分とかなりミスが多かったと思われる。今回強く感じたことは以前は日本と同レベルであった西ドイツ、フランス、ニュージーランド、米、伊などの国々が急速に実力をのびしており、日本はこのままでは相対的に見てどんどん取り残されてしまう

だろうということであった。これに対してなすべきことは、ニュージーランドがディーター・ウルフをコーチに呼んで成果を挙げているのを考えても、だれか核となる人間を中心としてチームとしてのリレーに対する組織的なトレーニングをおこなうことであると思う。

また今回までは1走にエースの村越をもってきてきたが、なんとか他のチームの1走にくらいついて帰ってこれるような人間を育ててエースを後半にもってこれるようにならないと先行きは暗い。

鶴岡 千津子

第11回世界選手権大会遠征にたくさんの御援助いただきありがとうございました。冬のオーストラリアのテラインは可能度バツグンで日本では考えられないようなスピードレースを体験できました。世界選手権のトップのオエリエンティアと一緒にレースをして感じたことはスピードの差です。また長い距離の林の中の直進も初めてで、日本のオリエンテーリングの課題をいくつも発見させられました。満足できるような成績は残せませんでした。今回の経験が次回以後に役だてられればと思っています。

世界選手権83から予選のシステムができたが、オーストラリアが世界選手権85の開催を承諾した時点では、オーストラリアはそのシステムを認めておらず予選を行わないという方針を貫いた。今回は予選が行われない最後の世界選手権ということで日本チームは個人主体で行くという方針であった。そこでチーム内の予選でベケであった私が抜け、山岸、村越、福島、斎藤が個人に出場することになった。

個人のテラインはグラナイトと呼ばれる山がちで花こう岩でおおわれている地域で、アボガリオ（はだか岩）とオリエンテーリングを難しくする適度の藪から成る。そのテラインに一早く適応したのは山岸である。彼は持ち前のスピードはないが、細かくチェックし、我慢して走り通すというオリエンテーリングをこの難しいグラナイトにマッチさせたのである。村越は自分のオリエンテーリングを適応させるのは時間がかかり、テラインに対して不安感を抱いていた。福島と斎藤は技術的な確信はなく、オリエンテーリングをするのに精一杯であった。一方女子は全員初めての世界選手権出場ということもあって、技術面がどうこうというよりもレースへの準備ができていなかった。

今回は初めてヨーロッパ大陸からはなれた世界選手権ということで、北欧などの強国も早くからトレキャンプに参加し、入念な調整を行っていた。その中で、勝者はノルウエーから出ることをだれもが予想し、前回優勝のモルテン・ベルグリア、前回の北欧選手権を制したトーレ・ザグボルデン、巻返しをはかるオイビン・トーンの名があがった。また、スウェーデンの腹が出できたがエースのヨルゲン・モルテンソン、ヨーロッパ選手権を制したオーケ・ヨンソン、フィンランドのエース、カリ・サリネンらも期待されていた。女子の焦点はスウェーデンのアニキャン・クリングスタットのV3をノルウェーのブリット・ボールデンが阻むことができるかにあった。

さて、コースについて簡単に述べると、15.2km、ノ3.9%。前半から息の抜け

ないショートレッグが続き、中盤に藪をぬけているミドル、ロングレッグがあり、その後比較的植生のよいところをぬけ、後半大きな山をかすめるロングレッグの後ショートレッグをつなぎゴールする。結局この中で中盤がポイントとなった。

まだ有力選手がほとんどスタートしていないうちにゴールしたのはノルウェーのエーギル・イバーセンである。彼は初めての世界選手権だがノルウェーの代表だけあって、メダルの狙えるタイムである。オイビンは前半からペースを乱し、乗り切れないままゴール。1、2枠を終えた時点では予想通り北欧勢が上位を占めた。特に母国のアボガリオを思い出シルンルン走ったせいかフィンランド勢が好調だった。ヨルゲンは3分後にトーレのプレッシャーを受けながらもトーレより先にゴール。そしてその直後にトーレがゴール。ここでトーレはエーギルを秒差で抜きトップに立った。この時点ではV2を狙うモルテンが8番で乱れていたもので、トーレはタイトルを手にしたつもりであったであろう。しかしこのころ会場ではフィンランド人の歓声があがった。第4ラジコンをカリがトップのタイムで通過したのであった。かれはヨルゲンやトーレがミスを行った11→12のレッグを無難にこなしてトップに出たのである。そしてトーレに2分差をあけてゴール。フィンランドに初のVをもたらしたのである。結局上位陣は近差の中にひしめいた。その中にミスなく無難にまとめて10位に入ったカナダのテッド・サン・クロアの成績は我々環太平洋地区のものにとって明るい材料であった。

一方女子は、中盤大きくミスをしたアニキャンが後半走力で挽回し、ブリットをかわろうじてかわし、V3を成し遂げた。またほとんど終盤までアニキャンにリードしながら最後に力尽きた3位になったスウェーデンのクリスティーナ・ブロンクビストの健闘が光った。

日本チームは村越、山岸は2時間を切り感動的であったが、それぞれ42位、46位と順位は以外に伸びなかった。山岸のスピードのないオリエンテーリ

ングで2時間の壁を切ったことは我々に希望を与えてくれたが、それ以上に世界の壁の厚さを実感させられた。斎藤、福島もキロ10分を切り、テラインの難易度からして決して悪いタイムではないが、それぞれ63位、64位におわった。女子はテラインの難しさに対応できず、技術面の不足による大きなミスを繰り返し、長田を初めとして成績を残すのがやっとであった。

長田 由紀

世界選手権への日本の女子の参加は、前回83年に引き続いて2回目であるが、全員が初出場であった。日本代表として世界選手権に参加するのだから、当然メンバーは「厳選」されねばならないはずだが、スコードで行ったセレクションも女子に関しては形式のみで希望者=選手となり、しかも補欠のいない4人だけの参加となった。しかし59年度の全日本大会の1、2、3、7位、東西両大会の勝者を含む顔ぶれであり、まあ今の日本の女子のトップ陣を代表するメンバーだといってもよいだろう。今まで女子に関するデータは無に等しかった。今回の私達の成績は現時点で日本の女子のエリートのレベルが世界においてどれぐらいに位置しているかを初めて評価し、記録として残せるものだと思う。そのことを踏まえて今回の結果を振り返ってみたい。

別紙の結果を見ていただければ一目瞭然だが、私たちの実力は他国と比較できぬくらい劣っていたと言わねばならない。「個人」では全員がぼろぼろと大きなミスをし（というより迷ったという方が妥当）リザルトボードの後ろをがっちり日丸で固めた。リレーでは、2チーム失格の為14チーム中12位（しかし、失格したUSAにはタイム的には勝っていた！）11位の国との差は約1時間。日本のDEを走る私たちは、世界選手権では無理にエリートクラスを走った初心者ほどの力しかなかった。オーストラリアという地理的条件で、ヨーロッパの後進国からはフルメンバーの参加がなく、またどの程度にセレクトされた選手だかわからないので、それらの国との力の比較は判断しがたい

が、あの個人のタイムでは、甲乙つけても意味がない。密かにライバル視していたニュージーランド、USAとはかなり差があると認めざるをえなかった。

こんなにまで見事な成績をとった原因がさまざまに考えられる。個人のレースでは、テクニックの未熟さもさることながら、何よりも精神的な弱さをさらけ出したという印象が強い。初めて走る世界の大きな舞台で、100%の走りをするのは本当に難しいことだが、それにしても大会の雰囲気や慣れぬ難しいテラインに翻ろうされて動揺し、ミスを重ねたという気がする。USA、ニュージーランドで良い成績を取った選手は世界選手権の常連だったということを考えれば「経験のなさ」つまりは世界の場への立遅れも原因していると思う。しかし、そのことを除いてもあの「爆発ぶり」は日本の女子の集中力の甘さ、精神力のなさをよく示している。

しかし男子に比べると全体的に安定力がなくレベルが低いのは、日本だけとは限らないようだ。成績をよくよく見ると、限度はあるにしろ、恐らく半数以上の選手が大きなミスをしているようだ。私が大きくどつぼる前の9では34位をキープしていたということを考え合わせても、走力、テクニックに大差がある現状でも、コースが難しければ（これが絶対条件）、精神面を鍛えることにより、日本の女子が世界選手権で一発30位以内に入ることは、男子以上に容易だと思う。

一方リレーでは、個人と逆にイージーなコースにおける世界とののはるかな隔たりを見た。言うまでもなく「スピード」の差である。大きくミスったらしいUSAの1走、2走を除けば、私達の個人の成績はまぎれもなくビリ。日本的だったリレーのテラインでつuitこの大差は現状では「絶望的」と言うより他はない。スピードの基本である走力の差は歴然としている。まず「鈍足」を直さねばなす術がない。

オリエンテーリング自体の未熟さの他にも、世界選手権に対する意識の低さ、準備不足、コンディショニングの失敗など原因はいくつもあげられるが、そ

これらの根底にあるものは、オリエンテーリングのレースに対する考え方の甘さ、勝負意識のなさではないかと思う。今の女子のオリエンテーリング界にはまともな競争がない。層の薄さのせいもあるが、私達は競争心に欠け、また正面きっての競争をきらう傾向がある。競い合うことがなければ、向上しようとする気持ちも生まれぬ。その結果トレーニング不足、精神的なもろさ、研究意欲のなさなど、もろもろの「弱さの原因」が生まれてくる。もっと互いにおつかりあうことが、レベル向上させる最も簡単で有効な方法だと思う。今の体質のままで、2年に1度の世界選手権に誰が行って何位をとってみたいしたことではない。要は、世界選手権を目指して、DEのメンバーが、いかに競い合いレベルをあげるか、である。これから育って来る若い多くの芽の成長の場となり得るように、そのために、今回の惨憺たる女子チームの成績を単なる記録としてではなく、貴重な資料や経験として十分生かしていかなければと思う。

短期の遠征をして

新沢 祐子

今回の世界選手権の個人戦では「棄権」という最もなげない結果しか残せず応援して下さった皆様に本当に申し訳なく思っています。こうして報告書を書くこと棄権したことに対する言い訳になってしまいそうですが、これが今後世界選手権に参加しようとする人の参考になればと思い書かせていただきます。

今回の私の日程は次のとおりです。

- | | | |
|------|---------|----------|
| 8/31 | 出発 | |
| 9/1 | トレコース | (ガリースパー) |
| 2 | モデルイベント | (グラナイト) |
| 3 | トレーニング | (ガリースパー) |
| 4 | 個人戦 | (グラナイト) |
| 5 | モデルイベント | (ガリースパー) |
| 6 | リレー | (ガリースパー) |
| 7 | 帰国 | |

このように本当にレースだけに参加する日程でした。そのため上の日程からもわかるように個人戦のテラインであるグラナイトのテラインについては他のメ

ンバーからの情報とモデルイベントの50分間で得た情報だけでした。日本を全く異なるタイプのグラナイトをこれだけの情報で理解することは私には無理でした。頭では「無理にスピードをあげず、とにかく慎重に」をわかっているつもりでしたが、実際にテラインに入るとどのようなオリエンテーリングをすればよいのか全くわからなくなり、私がやったのは宝探しでした。そしてこの棄権により私は全く自分のオリエンテーリングに自信をなくしてしまい団体戦では必要以上に慎重になってしまいました。結局これが私の実力であったわけです。しかし言い換えればこれだけの実力しかない私だからこそ、こうしたレースだけに参加するような日程ではなく、現地の日本とは異なるタイプのテラインにできるだけ多く入ってトレーニングできるような日程で参加するべきでした。しかし、現在の日本の社会で、学生以外で長期の休暇をとることは中々できないことであり、そうすると長期の休暇のとれない会社員は世界選手権に参加できないことになるのでしょうか。．．．？2年後のフランスでの世界選手権の時には会社をやめてしまおうかと思ってしまうこのごろです。

本植 早苗

最高に優れた地図・テライン・運営そして最強のオリエンティアが決まる大会とは知っていたものの、その中で自分が最下位になろうとはおもってもみなかったことだった。今回に限るだろうセレクションなしで本番を味わえた事は良い体験でラッキーだったのに、世界選手権に参加できただけでもいいじゃないかという人もいた。順位がどうのこうのではないかも知れない。自分の持っている最大の技術や精神をこのビッグ大会に焦点を合わせぶつけることができたかという内容が肝心だと思う。しかし、結果的に1ポイント(9→10)でなんと67分と歩くよりかかったほどとんでもなくどうにかなっちゃったのだし、目の丸は1番びりっけつだし、あーあ、私の為に日本は世界から相手にされなくなるのかしら。

この遠征で勉強した事、これからの課題と言えば1) 体力 約3週間毎日が試合かトレーニングなので十分持ちこたえられる様に。走力に関しては、まるで下り子供が下りエスカレーターをかけ登ろうとしてなかなか前進しないのと同じでもっともっと本気で走り込む事が必要だ。私はレース中、2度選手の姿を見たのだが初めは4→5で平ら。いつの間にか追いつかれ、それは前半だったのでなんとか行けるかなあと夢中でついて行く事僅か10数m、みるみる小さくなってついに置きざりにされ、取りのこされた時は現在地はわからずボー。まざまざと見せつけられた感じでショック。ついて行くなんてちょとひきょうな手だったのかも知れないけど。とんでもない、あっという間に置いてかれた。それは怖いとおもった。そんなに地図を見ながらチェックしてたらたちまち差は広がるだろうし、かといって技術なしのはだかで走ることのみしていたらオリエンテーリングにならないものネ。うーん、体力=走力であった。

2) 健康 日本の夏に対し豪は春先。冷たい雨と暖房でカラカラに乾いたのがカゼの原因。全く自分の管理のぬけてた事があやまち。後者では濡れタオルを置くなど初歩的な事で防げた。

3) 精神 パレードの時には「私も世界の中の1人だ」の上向き。いわゆる”世界大会”にこれから選手として。の間際になっての縮じこまった下向きの複雑な心境。しかし援助者の「がんばれ日本代表達」「精一杯やってきて」のメッセージに心張りつめる。事実として、はずかしい、惨め、なさけない、顔向けできない。人は私の成績を忘れてくれるだろうかなどとショボくれてたり、自分を捨てててしまいたい気分だった。けれども過ぎてしまった事にいつまでも泣いていたってどうしようもない。マイナスにばかり流れてしまったエネルギーを挽回しないと。この先「フランスへ行こうヨ」と声をかけてくれる人がいるだろうか。「なにクソ、メンツをはらしてやるゾ」というファイトが起きるだろうか。それには「一生懸命、努力」

それにしてもあれ程までに悩まされたグラナイトテラインが幾度か夢の中に

現れ、さすがダメージは大きかったとつくづく思うが、1ヶ月近く過ぎて恐怖心も大分薄れた。

個人ゴール後、さんざんだった私に「ご苦労さん」「怪我でもしたのかと心配してたんだヨ」と暖かく迎えてくれたみんなありがとう。

チームドクターとして

愛場 庸雅

今回は、私がWOCARNに参加する意思があったことと、医者であるという2つの理由で初の世界選手権日本チームドクターとして選手諸君の面倒をみる事になったわけですが、実は、私の専門は耳鼻科であり、実際必要とされる内科、整形外科、スポーツ医学的な知識が十分でない為に、結果的に十分な役割が果たせなかったのではないかと反省しています。チームドクターの役割というものを考えてみますと、①病氣、怪我の予防②病氣、怪我の診断と治療③コンディション調整の指導④トレーナーとしての役割⑤その他の医学的事項（ドーピングコントロールに関する事など）が上げられます。本来の意味からすれば、③④はドクターでなくてもよいわけですが、日本のスポーツ界においては未だトレーナーの身分が確立されておらず、チームのコーチすら存在しないオリエンテーリング界の状況ではむしろこの方が大きな役割を持っているのではないかと思います。その点、今回は私が、選手諸君のコンディションと調整に対する意識を十分把握しておらず、確固たる指導ができませんでした。またマッサージやテーピングに関しても本や雑誌で得た断片的な知識と、自分自身のわずかな経験からトライしてみましたがあまり満足できるものではなかったようです。やはり普段から選手諸君の体力の程度、コンディションを把握し、トレーナーとしての知識を有する人が必要です。

上記の①と③に関しては、指導も大事ですが、選手の自覚が重要なファクターになります。本番直前に病氣になったり、調整が十分に行えないようでは、自己管理が悪かったといわざるを得ません。重要な大会でベストを出そうと思

えば、選手自身の徹底した自己管理と、厳しい節制が必要です。その点、残念ながら今回の日本チーム内にはかなりの甘さがあった様に思います。慣れないテラインの為、現地でなるべく多くのトレーニングを積むことは確かに必要ですがそれを本番直前の1-2週間でおこなうのは、疲労を蓄積し、コンディショニングの面からはかえって害になるようにも思います。やはり現状ではなかなか困難ですが、長期の見通しをたてると共に、せめてその前年のトレーニングキャンプから、現地のテラインの状況を体験しておくことが必要なのではないのでしょうか。

今回の遠征メンバー

役員： 田口 肇 ， 石井 龍男， 愛場 庸雅， 西田 伸一

選手： 山岸 倫也（チームリーダー） ， 村越 真

多田 正純， 福島 弘幸， 斎藤 宏顕

長田 由紀， 木植 早生， 新沢 祐子， 鶴岡 千津子

WORLD ORIENTEERING CHAMPIONSHIPS- WOMENS INDIVIDUAL RESULTS - 1985 - BENDIGO - AUSTRALIA

NAME	NAT	1985 - BENDIGO - AUSTRALIA												TOTAL			
		5-01	01-02	02-03	03-04	04-05	05-06	06-07	07-08	08-09	09-10	10-11	11-12		12-13	13-14	14-F
Distance in metres		490	290	420	650	990	220	440	530	740	890	1110	450	770	150	240	8300
1 Annichen Kringstad	SWE	2:31	1:44	2:31	3:56	5:14	2:09	5:36	5:11	3:36	4:52	7:26	2:20	5:12	1:16	0:40	54:14
2 Brit Volden	NOR	3:04	2:04	3:43	3:19	5:12	2:16	3:13	3:32	4:03	5:57	8:42	2:40	6:11	0:36	0:35	59:07
3 Christina Blomqvist	SWE	3:20	2:00	2:35	4:28	4:46	2:12	2:56	3:21	4:29	5:47	8:16	2:38	7:50	1:51	0:42	57:11
4 Kerstin Mansson	SWE	3:12	2:17	4:03	4:43	4:51	2:04	3:15	3:24	4:22	6:37	10:06	2:34	5:12	1:46	0:37	59:03
5 Karin Rebe	SWE	4:15	1:56	3:02	6:55	6:01	2:45	2:55	3:35	4:14	5:42	8:08	2:42	5:20	1:20	0:51	59:41
6 Ada Kucharova	TCH	3:18	2:18	3:19	4:24	8:37	2:03	3:14	3:33	4:19	6:31	8:52	2:33	5:25	1:26	0:43	60:35
7 Charlotte Thrane	DAN	1:45	5:30	4:05	4:57	5:46	2:07	3:52	4:24	4:25	7:15	8:27	2:46	5:19	1:31	0:38	62:47
8 Heile Johansen	NOR	3:04	2:26	3:30	4:53	6:33	2:33	3:38	3:53	4:40	6:25	10:06	2:53	5:53	1:42	0:46	62:55
9 Heidrun Finte	BRD	4:29	2:03	3:00	4:49	8:07	2:01	3:53	4:06	4:06	8:14	8:06	2:36	5:16	1:37	0:42	63:05
10 Ellen Sofie Olsvik	NOR	3:19	2:12	2:46	4:50	11:34	2:13	3:15	3:09	4:12	6:24	8:57	2:48	5:52	1:17	0:40	63:28
11 Annerlitta Kottonen	FIN	3:32	2:14	2:50	4:16	5:33	2:26	4:23	3:49	10:00	5:59	8:14	2:41	5:03	2:01	0:41	63:42
12 Ritte Karjalainen	FIN	3:40	2:25	3:39	4:43	7:51	2:24	4:31	4:22	4:02	7:20	8:19	2:43	-	-	0:37	64:06
13 Yvette Hegue	GBR	3:33	2:16	3:25	5:48	6:03	2:44	3:50	4:03	4:10	8:24	8:58	3:00	6:05	1:38	0:36	64:33
14 Regnhild Bratberg	NOR	3:04	2:47	5:25	5:01	5:03	2:29	3:21	3:19	3:58	6:03	9:26	4:23	8:37	1:13	0:40	64:49
15 Franke Sonderregger	SUI	3:31	2:02	2:42	4:39	4:55	2:35	3:07	3:39	4:19	5:41	9:53	12:16	5:07	1:59	0:36	67:01
16 Eva Bartova	TCH	3:21	2:07	3:09	5:01	5:10	2:02	3:12	4:45	6:09	7:28	9:56	7:33	5:25	1:26	0:42	67:22
17 Madeleine Seviar	AUS	4:11	2:29	3:15	4:55	9:28	2:14	3:46	5:07	4:39	6:42	9:46	2:35	6:43	1:00	0:39	67:29
18 Denise Demonte	CAN	3:44	2:21	3:29	5:34	6:16	2:19	3:50	3:55	4:26	8:15	10:56	3:44	5:06	1:37	0:39	68:11
19 Sue Key	AUS	4:40	4:50	3:26	5:43	6:26	2:08	3:21	3:36	4:20	7:55	11:11	3:14	6:00	1:41	0:42	69:13
20 Henne Birke	DAN	3:44	2:28	3:50	5:14	6:52	2:10	3:21	4:11	5:59	8:39	12:28	2:59	5:40	1:49	0:35	69:59
50 Iren Rostas	HUN	5:05	2:17	4:48	16:39	14:46	9:22	4:14	4:20	4:25	9:26	10:46	2:57	6:30	1:31	0:45	97:47
51 Gabriele Hoch	AUT	4:53	8:09	10:29	5:50	8:07	2:29	3:27	4:20	6:13	15:43	12:20	6:16	8:20	-	-	98:25
52 Roxanne White	IRE	4:28	3:33	4:27	9:18	15:09	7:54	6:57	6:50	6:29	8:55	13:52	4:00	9:12	3:07	0:53	105:04
53 Petro Wagnerova	TCH	3:39	3:46	5:22	6:02	34:07	2:00	3:25	4:24	3:59	7:51	18:28	2:55	6:42	1:55	0:45	105:20
54 Peggy Dickson	USA	4:22	4:47	3:51	8:50	9:22	17:52	4:19	4:53	9:21	8:20	14:23	3:49	8:38	2:09	0:41	105:37
55 Christine Vanzo	ITA	5:02	4:48	4:52	9:00	8:18	2:02	3:38	4:24	6:36	16:28	24:23	5:49	8:27	3:50	0:44	108:21
56 Marianne Fent	HUN	7:13	6:52	5:55	7:25	22:50	2:32	11:37	4:42	4:42	5:59	12:23	7:31	6:24	2:38	0:34	109:17
57 Yuki Osada	JPN	4:15	5:08	3:37	5:41	6:30	3:01	5:34	4:46	6:39	26:44	23:01	3:55	7:38	2:05	0:47	109:21
58 M. Chilingirova	BUL	4:25	5:07	14:55	5:01	22:01	3:22	3:25	3:53	4:54	8:55	23:58	3:16	6:33	1:31	0:51	112:07
59 Ute Bettigheimer	BRD	11:57	18:14	4:04	8:28	6:31	3:57	3:31	9:09	7:47	5:51	19:20	10:25	6:16	2:22	0:45	118:33
60 U. Heikkila-Morenska	POL	21:08	2:45	4:49	11:07	6:21	3:09	5:10	5:08	7:08	21:30	20:11	3:13	6:32	2:03	0:52	121:06
61 Bernadette Gosset	FRA	6:50	2:42	4:04	6:36	44:15	2:29	3:57	5:92	5:45	15:25	11:18	2:57	6:31	2:15	0:43	121:39
62 Linda Kohn	USA	10:28	2:49	8:56	10:34	12:53	3:20	11:52	4:37	9:11	11:20	25:39	3:39	7:45	2:52	0:46	126:41
63 Chisuko Tsuruoka	JPN	15:48	3:10	4:55	7:23	11:57	11:32	7:24	5:36	12:10	10:00	27:56	3:21	8:19	2:27	0:56	132:50
64 Jeanine Browne	NZE	16:38	6:32	6:40	5:32	15:31	2:47	5:03	5:10	5:05	13:37	37:50	8:31	7:09	1:59	0:46	138:50
65 Sanae Kiue	JPN	4:45	2:47	5:35	8:59	13:04	8:57	6:42	6:06	4:57	67:41	24:00	3:11	7:01	2:33	1:06	167:24
66 Yuto Shinzawa	JPN	10:29	2:45	22:03	7:43	7:51	-	6:34	6:56	-	-	-	-	-	-	90:00	DNF

PROVISIONAL RESULTS

1985 WORLD ORIENTEERING CHAMPIONSHIPS

PROVISIONAL RESULTS

R E L A Y - M E N

Place	Country	Leg 1	Leg 2	Leg 3	Leg 4
1	NOR	59.51	1.58.44	2.56.45	3.52.44
2	SWE	57.31	1.54.58	2.54.27	3.54.21
3	SUI	59.46	2.01.10	3.00.20	4.03.33
4	HUN	59.43	1.58.39	3.01.04	4.05.31
5	FIN	57.33	1.58.51	3.01.43	4.10.30
6	TCH	1.05.37	2.09.43	3.13.22	4.16.59
7	DAN	1.00.01	2.07.43	3.12.33	4.17.00
8	AUS	1.02.09	2.11.43	3.23.00	4.29.16
9	BRD	59.42	2.08.48	3.22.44	4.31.11
10	GBR	1.01.56	2.07.42	3.30.02	4.34.09
11	AUT	1.05.25	2.18.38	3.30.34	4.38.01
12	FRA	59.52	2.07.26	3.31.01	4.53.28
13	NZE	1.11.27	2.29.34	3.53.31	5.10.08
14	USA	1.23.22	2.39.53	3.50.57	5.11.26
15	ITA	1.17.11	2.45.36	4.07.07	5.26.50
16	JPN	1.02.19	2.29.39	3.49.31	5.28.23

INDIVIDUAL RESULTS

R E L A Y - M E N

Place	Country	Leg 1	Leg 2	Leg 3	Leg 4	Total Time
1	NOR	59.51	58.53	58.01	55.59	3.52.44
2	SWE	57.31	57.25	59.31	59.54	3.54.21
3	SUI	59.46	1.01.24	59.10	1.03.13	4.03.33
4	HUN	59.43	58.56	1.02.25	1.04.27	4.05.31
5	FIN	57.33	1.01.18	1.02.52	1.08.47	4.10.30
6	TCH	1.05.37	1.04.06	1.03.39	1.03.37	4.16.59
7	DAN	1.00.01	1.07.42	1.04.50	1.04.27	4.17.00
8	AUS	1.02.09	1.09.34	1.11.17	1.06.16	4.29.16
9	BRD	59.42	1.09.06	1.13.56	1.08.27	4.31.11
10	GBR	1.01.56	1.05.46	1.22.20	1.04.07	4.34.09
11	AUT	1.05.25	1.13.13	1.11.56	1.07.27	4.38.01
12	FRA	59.52	1.07.34	1.23.35	1.22.27	4.53.28
13	NZE	1.11.24	1.18.10	1.23.57	1.16.37	5.10.08
14	USA	1.23.22	1.16.31	1.11.04	1.20.29	5.11.26
15	ITA	1.17.11	1.28.25	1.21.31	1.19.43	5.26.50
16	JPN	1.02.19	1.27.20	1.19.52	1.38.52	5.28.23

R E L A Y - W O M E N

Place	Country	Leg 1	Leg 2	Leg 3	Leg 4
1	SWE	45.40	1.31.50	2.18.31	3.01.21
2	NOR	45.37	1.33.00	2.19.45	3.01.31
3	SUI	50.25	1.35.48	2.30.32	3.21.31
4	DAN	51.58	1.41.13	2.34.02	3.24.23
5	TCH	47.40	1.48.53	2.43.07	3.32.04
6	FIN	48.25	1.42.59	2.41.16	3.32.55
7	GBR	47.50	1.43.11	2.37.05	3.33.43
8	BRD	50.26	1.42.50	2.37.37	3.40.10
9	HUN	47.31	1.43.06	2.47.36	3.59.13
10	NZE	50.09	1.54.36	3.01.58	4.09.37
11	AUT	55.54	2.06.26	3.17.23	4.23.47
12	JPN	1.06.37	2.13.01	3.40.05	5.21.47
13	USA	1.39.18	2.58.27	D.N.F.	D.N.F.
14	AUS	56.10	1.48.25	D.N.F.	D.N.F.

INDIVIDUAL TIMES

R E L A Y - W O M E N

Place	Country	Leg 1	Leg 2	Leg 3	Leg 4	Total Time
1	SWE	45.40	46.10	46.41	42.50	3.01.21
2	NOR	45.37	47.23	46.45	41.46	3.01.31
3	SUI	50.25	45.23	54.44	50.59	3.21.31
4	DAN	51.58	49.15	52.49	50.21	3.24.23
5	TCH	47.40	1.01.13	54.14	48.57	3.32.04
6	FIN	48.25	54.34	58.17	51.39	3.32.55
7	GBR	47.50	55.21	53.54	56.38	3.33.43
8	BRD	50.26	52.24	54.47	1.02.33	3.40.10
9	HUN	47.31	55.35	1.04.30	1.11.37	3.59.13
10	NZE	50.09	1.04.27	1.07.22	1.07.39	4.09.37
11	AUT	55.54	1.10.32	1.10.57	1.06.24	4.23.47
12	JPN	1.06.37	1.06.24	1.27.04	1.41.42	5.21.47
13	USA	1.39.18	1.19.09	D.N.F.	1.16.11	D.N.F.
14	AUS	56.10	52.15	D.N.F.	56.46	D.N.F.